

# 中国語における欧化研究の変遷と今後の可能性

関 光 世

## 要 旨

中国語の欧化を巡る研究は王力が出発点であると言われるが、その後は、まとまった研究を海外に譲り、大陸では空白とも言える状態が続いた。再燃の兆しが見られるのは21世紀に入ってからである。賀（2008）、崔（2013）といった研究が発表されたが、これらについて未だ客観的な評価はなされていない。

本稿では、欧化の形成から王力までの「形成期」と、王力以降20世紀末までの「空白期」の研究を振り返り、さらに賀（2008）を中心に、「再燃期」における新たな研究の流れとその成果について考察した。

その結果、再燃期の研究は以下の点で過去の論証における不足を補い、従来の議論を総括し、新たな時代における欧化研究の端緒を開く意義を有するものであることを指摘するに至った。

- 1) コーパスの活用によって論拠の客観性、信頼性を高めることに成功した。
- 2) 新たに「出現頻度」という観点による対比という手法を確立した。
- 3) 空白期に散見された欧化の弁別についての議論を総括し、説得力のある新たな見解を提示した。
- 4) 欧化研究を欧化の弁別からその動態観察という新たな段階へと進めた。

今後の研究は、欧化現象の動態観察へと移ることが予測できる。本論ではさらに、「欧化の程度が高い」とされた徐志摩の欧化を巡る議論を例に、ある作家、ある時期の欧化の様相を客観的に判断するには、従来の研究に欠けている「定着度」という新しい視点が有効かつ必要であることを指摘した。

キーワード：欧化語法、白話文、王力、徐志摩、定着度

## はじめに

中国語における欧化語法の形成からすでに1世紀が経過している。欧化を巡る研究は、王力（1943, 44, 58）に始まるが、以降、まとまった研究を海外に譲り、大陸では空白とも言える状態が続いた。再燃の兆しが見られるのは21世紀に入ってからである。近年、賀（2008）、崔（2013）といった新たな研究成果が発表されたが、これらについて客観的な評価は未だなされていない。

本稿では、白話運動の盛り上がりから王力までを欧化の「形成期」、王力以降20世紀末頃までを「空白<sup>1)</sup>期」、21世紀初頭を「再燃期」と名付け、各時期における欧化研究を振り返る。形成期については、1920年代に活躍した詩人徐志摩の欧化を巡る議論を視野に入れながら、主に王力の記述の意義とその限界に言及し、空白期についてはKubler（1985）と謝耀基（1990）をレビューする。再燃期における欧化研究にとって、1世紀という時間の経過自体が、その間

の用例の増加という点で有利に働いたことは明白であるが、加えてこの間のコンピュータの発達も、研究の新たな展開に大きく貢献した。この点を踏まえ、この時期の研究が従来の研究をどのように継承し発展させたのか、研究の主眼や手法はどう変化したのか、について賀（2008）を中心に概観する。

最後に、従来の研究成果を踏まえた今後の欧化研究の可能性について、徐志摩の欧化分析を例に挙げながら考察し、新たな研究の可能性を示す。賀陽によって確立された「出現頻度の対比」という手法に「定着度」という視点を追加することで、欧化の項目、作家、時代に的を絞った、より詳細な欧化の様相を浮き彫りにすることができ、欧化研究の新たな進展を促す点を指摘したい。

## 1. 欧化語法の形成から王力まで

### （1）白話運動と欧化語法の形成

白話文の欧化を巡る歴史的背景や欧化語法の形成の過程については、大河内（1955, 1961）、大原（1994, 1996）に詳しい。大河内の言を借りて概括すると、欧化語法とは「五四の時代にもたらされた近代的な、論理的な思考様式が従前の中国語の白話では表現できなかった」ため、それを可能とする「新しい白話文を作り上げる」目的で、主に海外留学を経験した知識人たちが、試行錯誤や暗中模索を繰り返しながら推進した、「文言や白話の破格な拡大使用」の産物である。その流れを決定づける起爆剤になったのが傅斯年の《怎样做白话文》（1919）だ<sup>2)</sup>。傅は白話運動の到達目標と目標実現のための方法を具体的に示した。欧化された白話文こそ理想の白話文であるから、西洋語の様式や文法を直接使うことや西洋語の文章の直訳練習などを通して、失敗を恐れず欧化の試みを進めるべきである<sup>3)</sup>、というのが彼の主張である。この呼びかけは、白話運動の担い手となる当時の中国人留学生たちに絶大な影響を及ぼしたことが知られている。例えば徐志摩は、1922年に英国留学から帰国するや否や、傅斯年の呼びかけに応えるかのように次々と翻訳作品を世に出し、さらに《晨报副刊》の編集者となった1925年からは、自他の翻訳作品を精力的に紹介し、その文体から欧化の主要人物の一人とみなされている。翻訳作品の数の推移を見ても、徐志摩がキャリアの前半において特に翻訳に注力したことがわかる<sup>4)</sup>。また、彼自身西洋語の翻訳を「興味深い練習<sup>5)</sup>」だと語っていることから、徐志摩が傅斯年に影響を受け、使命感に燃えて白話文の完成を目指していたことは推測に難くない。

徐志摩の文体については、王力が「徐志摩は欧化の程度が比較的高い」<sup>6)</sup>と述べたことが知られているが、この指摘は些か感情的である。また、朱湘は徐志摩の欧化の技巧が「非常にぎこちない」（「徐君艺术上的第六个缺点要算有时欧化得太生硬了」）と8か所の実例を挙げて指摘した<sup>7)</sup>。その指摘は初期の徐志摩の文章表現について言語学的な観点から具体的に指摘した

例として興味深いのが、欧化の定義が曖昧で根拠に乏しく、説得力に欠ける。一方陳西滢は徐志摩の文体を「彼（徐志摩）は中国と西洋の言語を鍋の中で一つに溶かし、意のままに使いこなす道具にしている。時にぎこちないかもしれない、時に不自然かもしれない、しかしいつも流暢で、徐志摩独特の言葉となっている<sup>8)</sup>。」と評価している。肯定的な指摘もまた同様に感情的である。

以上から、この時期、欧化は全体像が明確ではなかったため、知識人たちは個々に試行錯誤を繰り返しながら、発表された個別の文章表現を批評・検討しあい、適者生存をとおして新たな文体を作り上げようとしていたことが伺える。

## (2) 王力の研究

欧化について言語学的な角度から最初にまとめた記述を行ったのが王力の《中国現代語法》(1943)、《中国語法理論》(1944)、《漢語史稿》(1958)<sup>9)</sup>である。彼は「欧化語法」を「最近二三十年の間に西洋文化の影響を受けて生まれた中国語の書面語に見られる新しい語法」と定義<sup>10)</sup>したが、元来中国語にも存在したが顕著ではなく、五四以降に西洋語の影響で顕著になった現象をも広く欧化と捉えていたことがわかる。王は一貫して伝統的な中国語と欧化語法の違いを明らかにすることを目的に<sup>11)</sup>、是非を論ずることはせず、進展変化する欧化の現時点の様相をもれなく記述することを目指した<sup>12)</sup>。その結果、個々の欧化現象が列挙され、全体像が明らかになり、知識人たちは暗中模索の中で、一定の指標を得ることができた。欧化に対する態度と定義、さらに個々の欧化現象について一定の指標を提供したという点で、王力の研究は極めて意義深く、紛れもなく欧化研究の出発点であると言える。

その記述については「系統だっていない」、「論証が十分でない」（賀 2008）との指摘があるが、それは、前提となる「欧化現象の存在」自身の証明が不十分なことに起因すると見られる。

以下は介詞“当”の欧化に関する《中国現代語法》(p. 363)の記述である。

英文の“**When**”在中国語里没有适宜的字可以翻译，只好勉强用一个“当”字或“在”字；同时，又依照中国语的老习惯，在时间修饰的后面加上“时”字或“时候”二字。这样，咱们可以说“**When**”等于“当……的时候”或“在……的时候”。下面《红楼梦》的例子，是按欧化文法加上“当”字，或“当……的时候”的<sup>13)</sup>。

(A) (当) 它们做到那里的时候，自然有了。(14)

(B) (当) 我再问他两句家常过日子的话 (的时候)，他就连眼圈儿都红了。(32)

现在再举现代作品的一个例子：

……而且自白我们只是说着自己，每当我们不能再守沉默的时候。

(周作人《文艺批评杂话》)

王力は、英語の“When”に“当”をあてて“当……的时候”とするのは欧化だと主張するために、まず例(A),(B)によって、旧白話にこの用法が存在しなかったことを証明し、次に周作人の欧化用例を1例示し、欧化の存在を示した。同じく王の《中国语法理论》では、全体をとおして、英語表現と欧化用法の関係の説明に重点が置かれているため、英文の例文が増え、中国語の欧化例はさらに少ない。《中国语法理论》に見られる“当”についての記述は以下のとおりである。

时间连词最难欧化，因为中国本来没有这种东西。有人拿“当”字去抵挡“when”和“as”，但若说成“当……的时候”，仍旧只是一种谓语形式，因为“当”仍有它的动词性。如果要把“当”字造成一个纯然欧化的连词，应该避免在后面加“时”字或“的时候”字样。例如“when I looked again I saw nothing”只该译为“当我再看，我看不见什么。”但是截至现在为止，欧化还没有达到这一个阶段，至少大多数的情形是如此。(p. 471)

ここでは、“当……的时候”を欧化現象だとする主張はトーンダウンし、“当”の後ろに“……”时”や“……的时候”を伴わないものこそ純然たる欧化だ、と新たな観点を示しているが、欧化を仮定した中国語の訳文(下線部)を示しただけで、「現在のところ欧化はまだそこまで至っていない。少なくとも大多数がそんな状況だ。」と結んでいる。旧白話の用例、五四以降の用例共に乏しく、有効な対比がなされていない。

欧化に対する態度が時に感情的である点も、王の論述に一貫性という点で影を落としている。例えば、王力は《中国语法理论》の中で「魯迅の文章は欧化の程度が低く、徐志摩の文章は欧化の程度がずっと高い。その中には変質した欧化もある。西洋語に通じていないか理解の浅い人が、欧化した文章を真似ているうちに、次第に真の姿を失ってしまったのだ。…そのような変質した欧化語法は保留して取り上げないことにするしかない。」<sup>14)</sup>と語っている。些かネガティブな響きを感じるのだが、このような評価に至った具体的な理由や根拠に言及はない。王力の挙げた出典が明らかな約30の用例のうち、徐志摩の用例数は魯迅、林徽因とほぼ同数で、また全ての欧化現象に徐志摩の用例がみられるのでもない。さらに例文の出典も散文《我所知道的康桥》と《巴黎的鱗爪》に限られている。下線部①に至っては、自らの言である「変質した欧化についても、将来的に中国語が体をなさないものにならないように、明確に指摘しなければならない」<sup>15)</sup>。や「是非や賛成・反対ではなく模倣した事実、存在を指摘するのだ」<sup>16)</sup>。という態度とも矛盾する。また、例えば“着”の用法についての言及で「このような“着”の濫用は真の欧化とは言えない。変質した欧化というべきだ。」と嫌悪感をにじませている<sup>17)</sup>。

## 2. 王力後の空白期

王力に続いて北京师范学院による《五四以来汉语书面语言的变迁和发展》(1959)が出版されるが、その後大陸では21世紀に入るまでまとまった欧化研究は見つからない。その間、海外では80年代のCornelius C. Kublerの“A Study of Europeanized Grammar in Modern Written Chinese”(1985)、謝耀基の《現代漢語欧化語法概論》(1990)などが知られている。

北京师范学院(1959)は、五四運動四十周年を記念して、この間に文言文から白話文へと大きく変貌した書面語の変遷と発展の過程を明らかにする目的でまとめられた。三編に分かれ、第一編は主に文言文と白話文の間の相克について、第二編は五四以降の語彙の変化について記述されている。欧化語法については、第三編に「五四以降の語法の発展」としてまとめられている。

欧化の定義について具体的な記述はないが、“‘宾语子句’ 提向句首，在汉语历史语法本来也是有的。但是很少。……真正的宾语子句提向句首的句法的兴起和广泛应用，是五四以后的事。因为印欧语的习惯是如此，翻译时也就照着办了。”(p. 176 下線は筆者による)というような言及が頻出しており、伝統的な中国語にも存在するが、五四以降に大きく発展した現象についても広く欧化と判断していることがわかり、王力の定義を継承していることが伺える。

欧化項目は形態論(一些词的形态的丰富，一些词的功用的规范，一些词的用法的扩大)と統辭論(句法结构的复杂和精密，句法结构的简练化，句法结构的多样化)に整理されている。主に五四をはさんだ文言文と白話文を対比することで書面語の変化を捉え、欧化現象を指摘する形となっている。有標の受身文など、王力の指摘した現象で言及のない項目もある<sup>18)</sup>。また、積極的に翻訳作品から欧化用例を採っているため、西洋語との関連をより明確に知ることができる。

Kubler(1985)は、考察対象を巴金の《家》<sup>19)</sup>に絞っているという点で異色である。“We will not attempt here to pass judgement on what is ‘good’ Chinese or what is ‘bad’ only describe the present linguistic situation of Modern Chinese, …”に見られるように、王力の「是非を論ぜず、記述するに留める」という態度を継承しつつ《家》にみられる欧化の用例を収集したが、新しい欧化項目を指摘するには至らず、また、中国語における英語の影響を解明し「白話文の欧化」を明らかにする、という目的に対して、調査対象の範囲が狭い点是否めないが、特定の作家に焦点をあてた総合的な欧化研究の代表である。また、巴金は1957年に《家》を改訂する際、多くの欧化項目について修正を加え、欧化の要素を削除したことが知られているが、修正版とオリジナルとの対比によってその間の欧化現象の変遷の一端を示そうとしている点は興味深い<sup>20)</sup>。

謝耀基(1990)は、上編：現代漢語語法の欧化の原因、中編：現代漢語語法の欧化現象、下編：漢語の欧化語法からなる。王力以来継承されていた「是非を論じない」という態度から一

歩踏み出し、「善」と「悪」の評価を下し、現代漢語の規範化を目的に欧化現象の帰納を試みている点が際立った特徴である。しかし、善悪の根拠が明確でないため、説得力に欠ける。中編で示された具体的な欧化項目は従来と大差ないが、用例は王力に比べると数も多く、鲁迅、周作人、朱自清、徐志摩などより少し時代が遅れる巴金、夏衍、俞平伯らの用例も挙げられており、用例の幅が若干広がっている。

この時期、以上のまとまった研究のほかに、王力に端を発した個々の欧化現象に関する研究、或いは語法史の角度からの欧化に関する言及は少なくない<sup>21)</sup>。王力後の大陸における空白期の欧化研究は、王力を踏襲した欧化項目のさらなる指摘と整理と同時に、新たな時代の欧化研究の基礎を築いた時代でもあった。

### 3. 再燃期の新たな欧化研究

この時期のまとまった欧化研究としては、贺阳（2008）の《现代汉语欧化语法现象研究》と崔山佳（2013）の《汉语欧化语法现象专题研究》を挙げることができる。欧化の形成から約1世紀を経て時間的な俯瞰が可能になり、またコーパスという利器を得たことによって、これらの研究は、実証性の向上という点で画期的な成果を上げた。

#### (1) 実証性の向上と出現頻度

贺阳は王力と同様、欧化を“把凡主要是在印欧语影响下产生的语法现象都纳入到‘欧化’中来，既包括汉语原本没有，完全是由于对印欧语语法结构的模仿而出现的语法形式，也包括汉语原本虽有，但只是在印欧语的影响下才得到充分发展的语法形式。(p. 28)”と定義し、欧化現象を比較的緩やかに捉えている。彼が目指したのは、第一に、すでに指摘された欧化現象と空白期に散見された欧化現象の弁別に関する議論を整理し、新たな手法で再度検証することである。

例えば、有標の受身文（以下“被”構文）については、非消極義<sup>22)</sup>を表す“被”構文の増加を欧化と言えるか否か<sup>23)</sup>が議論の中心だった。王力は、非消極義の“被”構文は古代中国語にも存在した<sup>24)</sup>が、五四以降に新たな発展が確認できるのだから、広義の欧化の定義に照らして、この現象は欧化現象だと述べている<sup>25)</sup>が、《世说新语》の“被”構文全27例のうち19例が消極義であった事実（1990 p. 399）と実際の欧化用例（周作人1例、作者不詳5例）を示しただけで、用例の数は十分とは言えず、出典にも偏りが指摘できる。その後の研究<sup>26)</sup>も同様で、用例の実証性という問題は解消されていない。

贺（2008）は、旧白話小説と五四以降の文学作品、学術著作、口語資料のコーパス<sup>27)</sup>を利用して用例を収集し、さらにそれらを消極義、中性義、積極義<sup>28)</sup>に分類し、全体に占める割合を示した。得られたデータをまとめると下表1、2のとおりとなる。表2で用いられたコー



パスは175万字（うち85万字は当代口語）で、収集した例文数は1000例以上にのぼる。

表1 旧白話における“被”構文<sup>29)</sup>の意味

コーパス	消極義	非消極義 (中性+積極)
《西游记》	95.4%	4.6%
《儒林外史》	98.0%	2.0%
《红楼梦》	88.2%	11.8%
《儿女英雄传》	89.1%	10.8%
《二十年目睹之怪现状》	91.2%	8.8%

表2 五四以降における“被”構文<sup>30)</sup>の意味

コーパス	年代	消極義	非消極義 (中性+積極)
現代文学作品	1923-1936	61.7%	38.20%
当代文学作品	1956-1995	60.2%	39.80%
当代学术著作	1994-1996	43.0%	57.10%
当代口語	1989	92.0%	6.00%

上の二表の対比によって、以下の点が一目瞭然となる。

- 1) 旧白話では、非消極義の“被”構文は平均8%程度にとどまり、主流は消極義である。
- 2) 五四以降、書面語において非消極義の“被”構文の増加が顕著である。
- 3) 2)の現象は口語では顕著ではない。

賀は次のように述べて“出現頻率”（出現頻度）を欧化の弁別のための論証に採用した。

“大部分欧化语法现象与汉语固有传统之间的差别主要体现在语法成分出现频率上，是罕见与广泛使用之间的差别，而不是绝对的有和没有的差别，对这些欧化语法现象，如果不采用频率统计的方法，将难以准确刻画它们的特征，难以准确描述欧化现象与汉语固有传统此消彼长的态势<sup>31)</sup>。”（大部分の欧化語法現象と中国語固有の伝統の違いは、主にその現象の出現頻度によって明らかになるもので、稀に見られるだけなのか広く用いられるかの違いであり、有るか無いかの違いではない。頻度の統計をとる以外に、これらを正確に浮き彫りにし、欧化現象と伝統的な中国語のせめぎ合いの様相を正確に記述することは難しい。）

下表3に、“被”構文の用例数を示した賀の統計結果をまとめた。1万字の用例数を出現頻度と考えることができる。

表3 “被”構文の出現頻度<sup>32)</sup>

コーパス	字数 (万字)	“被”構文 (例)	例/万字
現当代小説	270	2403	8.9
当代学術論著	75	1030	13.7
当代翻訳小説	81	925	11.4
当代学術翻訳	40	1028	25.7
明清小説	297	1384	4.7

表中の明清小説とその他のコーパスの出現頻度を比較すれば、五四以降、“被”構文の出現頻度の向上は明白で、さらに当代の翻訳とその他のコーパスの出現頻度の差から、この現象には西洋語の影響があることも見て取れる。以上から賀はこの現象を欧化現象だと結論づけた。

以上のように、賀（2008）は、空白期に個々の欧化現象について散見された欧化の弁別に関する議論を基礎に、膨大なコーパスを活用して例文の不足と偏りを補い、同時に出現頻度という新たな観点を取り入れて王力以来の「対比」の手法を応用することで、より客観的かつ実証性の高い根拠を提示することに成功した。

これに対し崔山佳（2013）は、“被”構文の五四以降の変化は西洋語との言語接触によって起こった量の変化にすぎないと反論している。崔は欧化の弁別について、漢語史の観点から、古代から近代の膨大な例を丹念に収集して通時的考察を加えているが、量的な変化を欧化とは認めないという狭義の定義<sup>33)</sup>に立つため、多くの現象について王や賀に対する反証を提示し、反対の結論に至っている。しかし、崔によって古代から五四以前の各時代における用例が大幅に充実した点は意義深い。

## （2）欧化の動態の観察

賀が目指した第二の目的は、欧化現象そのものの変化・変遷及び伝統的な中国語との関係を観察し、記述すること、つまり欧化現象の動態観察である<sup>34)</sup>。

欧化現象の動態観察に成功した例のひとつに、介詞“当”の接統詞化を挙げることができるだろう。賀は、第1章（2）で触れた王力の介詞“当”に関する記述の用例不足を補い、さらに時代に伴う変化をも明らかにした。以下は賀の統計をまとめたものである。



表4 介詞“当”の出現頻度の変化<sup>35)</sup>

語料	語料年代	当…的时候	…的时候	总计
《红楼梦》	18 世纪	4/0.7%	561/99.3%	565
《儿女英雄传》	19 世纪	11/7.3%	140/92.7%	151
冰心作品	1919-1922	10/6.1%	153/93.9%	163
鲁迅作品	1918-1922	3/4.4%	65/95.6%	68
鲁迅作品	1934-1936	21/20.6%	81/79.4%	102
刘心武作品	1981	31/47.0%	35/53.0%	66
陆文夫作品	1995	35/28.2%	89/71.8%	124
《尤利西斯》	1996	73/54.9%	60/45.1%	133
当代口语	1989	1/0.2%	573/99.8%	574

表5 “当”の接続詞用法の出現頻度<sup>36)</sup>

語料	当…的时候	当…	小计
《红楼梦》	4/100%	0/0.0%	4
《儿女英雄传》	11/100%	0/0.0%	11
小计	15/100%	0/0.0%	15
《李国文小说自选集》	32/76.2%	10/23.8%	42
《张炜作品自选集》	93/93.0%	7/7.0%	100
《苏童文集—末代爱情》	48/94.1%	3/5.9%	51
《梁晓声作品自选集》	15/48.4%	16/51.6%	31
《张贤亮小说自选集》	62/73.8%	22/26.2%	84
小计	250/81.2%	58/18.8%	308

上の統計をもとに、賀は出現頻度の対比による論証を行っている。表4では“当……的时候”の出現頻度は五四の前後で最大7.3%（平均4%）から最大47%（平均21%）に増え、また翻訳作品である《尤利西斯》（『ユリシーズ』）では突出して高く、口語では0.2%と低いことから、賀はこの現象が五四以降に西洋語の影響によって主に書面語で発展したと言え、“当……的时候”を欧化現象と考えて良いと結論づけた。さらに、表5によると、旧白話では“当……,”は皆無だったが、当代になると一定程度見られるようになることから、賀は介詞“当”の欧化は、“……的时候”が主流の旧白話時代から、五四以降30年代に“当……的时候”が出現し、近代では“的时候”が省略され、“当……,”がみられるようになった、というその変遷の過程を明らかにしたのである。

これに対し崔山佳（2013）は、表4で挙げられた旧白話の用例が《红楼梦》と《儿女英雄传》の二作だけでは依然として範囲が狭く、用例数も少ないと指摘し、北京大学古汉语语料庫から

収集した《孟子》《公羊传》《战国策》や明清の作品から77例を挙げている<sup>37)</sup>。しかし、用例の存在を指摘するだけで、比較の対象となる他の表現の統計を示しておらず、用例数の不足と偏りは解消されても、客観的な判断が下せないと言う意味で、従来の研究と大差はない。崔が多くの項目で例を挙げるにとどまり、結論を述べない理由はまさにそこにある。

再燃期の欧化研究は、形成期から空白期にかけて散見された欧化の弁別に関する議論を総括し、1世紀という時間の蓄積とコーパスという利器を得て、出現頻度の対比という手法を用い、欧化の弁別に関する議論に従来よりはるかに客観的かつ実証性の高い論拠を提示した。これによって、欧化を巡る議論の中心は弁別から動態の観察という新たな段階へと進んだ。その端緒を開いたという点で賀（2008）の貢献は大である。

### （3）出現頻度と欧化の「定着度」

賀（2008）で示されたデータは、徐志摩の欧化を評価する上で有効な比較対象を提供してくれた。

前節で挙げた介詞“当”の欧化現象について、徐志摩の翻訳作品《玛丽 玛丽》（1928年、70269文字）には関連表現が60例観察された。内訳は“…的时候”56例（93%），“当…的时候”3例（5%），“当…”1例（1%）である。このことから徐志摩においては、英語 when に“当”をあてる現象は顕著でないことがわかる。これを表4と比較すると、徐志摩における“当…的时候”の出現頻度（5%）は、ほぼ同時代の冰心（6.1%）や鲁迅（4.4%）の作品と同程度であることがわかり、この種の表現について徐志摩が「突出して欧化表現を使用していたとは言えない」と結論づけることができる。ここにおいて、出現頻度の違いとはつまり「欧化の定着度」に他ならない。

このように、使用頻度を対比することで時代、作品の種別、作家ごとに、欧化の定着度を評価することが可能になる。

筆者の知る限り、大原（1994）が最も早く「定着」という言葉で欧化語法の変遷を表現しているが、彼の言う「定着」は、外来の、欧化風の新しい表現が「欧化語法」として白話文の中に起こり、普及して行く過程における一つの段階を指すもので、本論で言うところの「定着」とは同じではない。大原は、欧化語法は1920年代に定着期を迎え、30年代に入るとかなり広い範囲に広まり、中国語の中に溶け込んで行ったと述べているが、使用頻度の対比という手法は用いておらず、王力と同様丹念に例文を挙げるにとどまっている。

今後の欧化研究は、時間の推移や文体（書面語/口語）による出現頻度の差、作品の分野など、細かな統計データを蓄積することで、欧化の変遷を浮き彫りにする欧化の動態観察が中心となり、それは関（2014, 2015）やKubler（1985）のような、個別の作家に的を絞った欧化研究にも新たな展開をもたらすだろう。徐志摩の欧化が同時代の作家の中で本当に突出していたのかどうか、どの欧化項目が突出していたのか、どの項目は欧化が進んでいなかったのか、な

どを明らかにすることが可能となり、徐志摩に対する「欧化の程度が比較的高い」という評価の妥当性を知ることができる。

しかし、現時点ではまだ比較の対象が整っていないため、限界もある。

例えば、五四以降の“被”構文の出現頻度向上の原因のひとつとして、無生物主語をもつ“被”構文の増加が挙げられる。賀（2008）によると、『西游记』で無生物主語の“被”構文が占める割合は8%、『红楼梦』では9%だった。これら旧白話の作品における出現頻度は8-9%なのに対し、徐志摩の翻訳作品では“被”構文175例中33例が無生物主語の“被”構文で、全体の18%だった。このことから出現頻度は旧白話の約2倍で、旧白話とはすでに一線を画し、一定程度定着していることがわかる。しかし、徐志摩と同時代の作品における出現頻度の平均値や他の作家における出現頻度など、比較の対象の統計が不十分なため、この時代において徐志摩が特に突出していたかどうかは未だ判断できない。

非処置性動詞を述語に持つ“被”構文の増加も、“被”構文の欧化をめぐる議論の焦点のひとつである<sup>38)</sup>。賀によると、1990年代に翻訳されたチャールズ・ディケンズの小説『二都物語』とジョン・スチュワート・ミルの学術書『女性の解放』における非処置性動詞の“被”構文の出現頻度は16%と34%で、一方徐志摩の用例175例のうち非処置性動詞の“被”構文は6例で全体の3%だった。徐志摩の統計も同じく翻訳作品を対象としているが、その差は比較的大きい。現時点では、五四以前の使用頻度や徐志摩と同時代の使用頻度など、評価に必要な情報が不足しているため、この現象の動態を「五四以降に起こって定着に向かった」と評価するには至らない。データの蓄積が待たれるところである。

#### 4. むすび

以上、代表的な著作を中心に中国語の欧化研究の歴史を概観した。その結果、「現象の指摘と記述」から「欧化の弁別」の段階を経て「動態観察」に至る欧化研究の約100年の流れが明らかになった。

王力による旧白話と五四以降の用例の対比という論証の手法は再燃期まで継承されたが、賀陽によって「出現頻度」という観点が加えられたことで、弁別の議論に客観的かつ実証性の高い論拠を示すことに成功した。このことが欧化研究を弁別から動態観察という新たなステップへ進める契機となったと言える。加えてこの間の用例の蓄積とコーパスの充実が大きく貢献したことは言うまでもない。

今後の研究は、1世紀という時間的俯瞰を前提にした欧化の動態観察が中心となることが予測できるが、本論では、動態観察に際して、欧化の「定着度」という観点から出現頻度を相対的に評価することで、個別の作家の同時代における欧化の度合など新たな研究の可能性を示した。しかし、現時点では比較に必要な出現頻度の情報が不足しており、データの蓄積が喫緊の課題である。

## 注

- 1) 本稿で言う「空白」とは、「中国語の欧化語法に関して総合的に取り上げた著作が見当たらない」という意味であり、この間も欧化語法に言及した論文や著書が全くなかったわけではない。
- 2) 胡適の《文学改良刍议》(1917)も挙げられるが、より具体的な呼びかけで当時の知識人に直接の影響を及ぼしたという点で《怎样做白话文》の役割は大であったと考えている。
- 3) 傅斯年(1919)参照。
- 4) 関(2015)1.2 徐志摩と翻訳参照。
- 5) 徐志摩は《我默的一首诗》で次のように語っている。“…我一时手痒，也尝试了一个翻译，并不敢与胡先生的‘比美’，但我却以为翻诗至少是一种有趣的练习(私は少なくとも詩の翻訳とは興味深い練習だと考えている)，只要原文是名著，我们译的人就只能凭我们个人的‘懂多少’，凭我们运用字的能力，‘再现’一次原来的诗意，结果失败的机会固然多，但亦尽有成品的”(1924年11月)
- 6) 王力《中国语法理论》p. 435 参照。次節で詳しく述べる。
- 7) 朱が评徐君《徐志摩的诗》邵华强(2011 p. 190 所取)で指摘した「ぎこちない欧化」は以下の8か所で、下線部が朱の感想である。①“好象开卷的第一首诗的末行“恋爱，欢欣，自由——辞别了人间，永远，”这“永远”两字便是酿成这行的破碎的罪魁。②又象《沙扬娜拉》一首诗里面“想赞美那别样的花酿，我曾经恣尝”这一行的“我曾经恣尝”，③《古怪的世界》一首诗里“怜悯！贫苦不是卑贱”这一行的“怜悯”，④《在那山道旁》一首里面“向着她我转过身去”这一行的“向着她我”，都是多么生硬！⑤再象《破庙》的“恶狠狠的乌龙巨爪”一行上面可以加个“是”字，⑥《在那山直旁》的“在青草里飘拂，她的洁白的裙衣”，一行当中也可以加个“是”字，⑦《希望的埋葬》的“长眠着美丽的希望”一行可以改作“长眠罢，美丽的希望！”便比本来自然多了。⑧还有《在那山道旁》一首诗里的“为什么迟疑，这是最后的时机，在这山道旁，在这雾盲的朝上”一句我看也不如改作“这是最后的时机为什么迟疑，在这山道旁，在这雾盲的朝上”，还比较的近中国语气一点。这首诗好，但是可惜欧化得太生硬了。
- 8) 陈西滢谈《志摩的诗》和《女神》参照。邵华强(2011 p. 201)
- 9) 《中国现代语法》(1943)と《中国语法理论》(1944)では、第六章を欧化的语法という表題で章立てしている。後者は前者の基礎に立ち，“新省略法，新到装法，新插语法及其他”の一節が最後に追加されているだけで、その他の項目に変化はない。また、後者は欧化の元になった英語表現の説明により重点を置いている。一方《汉语史稿》(1958)は第三章 语法的发展 第二十二节に“五四”以后新兴的句法として不定冠詞，連結法，並列式，插入法などについて挙げられているが、その他の欧化に関する記述は各節に散見される。
- 10) 原文は以下のとおり。“最近二三十年来，中国受西洋文化的影响太深了，于是语法也发生了不少的变化。这种受西洋文化的影响而产生的中国新语法，我们叫它做欧化的语法。”(《中国现代语法》p. 334)
- 11) 関連の指摘は以下にみられる。  
…就是帮助读者辨别中国语法的本来面目和欧化的语法(文法)有什么歧义之点，这种辨别在语法学上是必要的。(《中国语法理论》p. 434)
- 12) 王力の欧化に対する態度は以下に散見される。「言語は進展变化するものだ」という認識に立ち，欧化の良し悪しを評価しないという態度が感じられるが，④からは欧化に対する嫌悪感，警戒感を感じとることもできる。  
①这上头只有模仿的事实，没有逻辑上的是非(差不多一切欧化的语法当作如是观)。(《中国语法理论》p. 469)  
②对于中国语法只说明它有没有某种形式的存在，而不讨论应该或不该有那种形式”(《中国语法理论》p. 501)  
③咱们不必抱赞成或反对的态度。但是应该把它和中国原有的语法分别清楚。《红楼梦》和《儿女英雄传》和现代书报上的语法有什么不同之处。这是很有趣的问题，这是值得咱们仔细研究的。(《中国现代语法》p. 334)  
④欧化的语法却是人造的，取舍是否得当，它和中国的语言习惯是否能够相容，都是有批评余地的。此外，还有变质的欧化，更不妨明白指出，以免将来把中国语言弄得四不像。(《中国语法理论》p. 501)

- ⑤現在它虽然不够资格代表中国现代语，谁也不敢担保它永远不或多或少地侵入民众的口语里。……我们也就不该绝口不提了。（《中国语法理论》p. 434）
- 13) 《中国现代语法》p. 363 参照。
- 14) 原文は以下のとおり。“例如鲁迅的文章欧化程度浅，而徐志摩的文章欧化程度就深多了。其中又有变质的欧化，就是不通西文或西文程度很浅的人只知道从中国的欧化文章里区模仿，久而久之，渐渐失真。…本章对于那种变质的欧化语法，只好存而不论了。”（王力《中国语法理论》p. 435）
- 15) 注 12 ④参照。
- 16) 注 12 ①②③参照。
- 17) 原文は以下のとおり。  
就是拿“着”字做“有”字的后符号。“有”字虽可认为动词，然而它的动作性甚轻，所以从来没有“有着”的说法。最近三五年来，居然也有这种说法了，例如说：“这事是有着它的重要性的”，……这种滥用“着”字的地方，并不能说是真的欧化，只能说是变质的欧化，因为它在西洋语法中是没有什么根据的。（《中国语法理论》p. 466）
- 18) 本書が有標の受身文（“被”字句）を取り上げていない点について，崔（2013）は，非消極義の“被”字句は五四以前にも例があり欧化とは言えないという立場から，本書も同様の認識に立ったため取り上げなかったのだと理解しているようだ。しかし筆者は，本書は欧化を比較的広く捉えており，“被”字句についても本来取り上げるのが自然で，取り上げなかった理由は他にあるものと考ええる。
- 19) 本書は1933年版のオリジナルに加えて1957年の改訂版も考察の対象としている。改訂版では欧化語法を意図的に修正しているため，自然な欧化の変化を知る資料としては疑問が残る。（p. 123 参照）。
- 20) Kubler（1985）p. 93によると巴金はオリジナルでは272例あった“被”構文のうち，改訂版ではほぼ半分を修正している。この修正は欧化の影響を軽減しようとなされたもので，当時の“被”構文に対する受容の様子を垣間見ることができる。
- 21) 例えば，“被”字句の意味特徴に関する議論は，王力後，王还（1983），宋玉柱（1985），橋本万太郎（1987），租人植（1997），邢福义（2004）らによって続いた。これらが賀（2008）や崔（2013）の研究の基礎となっている。
- 22) 王力の言によれば，“消極義”とは“不如意或不企望的事”（1943 p. 353）で，本稿は“被”構文を「消極義」と「非消極義」に分ける。「非消極義」には“如意或企望的事”と，どちらでもない中立的な意味のものを含む。
- 23) 注 21 参照。
- 24) 橋本（1987），邢福义（2004）も同様の指摘をしているが，欧化であるかどうかの結論については明言していない。
- 25) 王力の関連する言及は以下のとおり。  
被动式所叙述的是不如意或不企望的事，并非一切的叙述句都可变为被动式。现代欧化的文章里，就不依照这一种习惯了。因为西文里如意的事或企望的事也都可用被动式，于是凡西文能用的，中国人也跟着用（尤其是翻译），许多从前不说的话现在也说了。（1943 p. 354）  
中国语法受了西文的影响，被动式的范围毕竟扩充了不少，在现代的欧化文章里，非不如意的事也可以用被动式了。（1944 p. 462）  
“五四”以后，由于受西洋语法的影响，被动式又达到了一个新的发展阶段。（1990 p. 381）
- 26) 注 21 参照。
- 27) 賀陽が用いたコーパスは，14世紀から19世紀末までの旧白話から五四前後の新白話，当代の書面語及び口語，さらには現代漢語の口語資料まで幅広い。具体的に挙げられているのは《家庭藏書集錦》（升級版，紅旗出版社），《中國古典名著新百部》（北京銀冠電子出版有限公司），《國學備覽》（商務印書館國際有限公司），《二十五史全文閱讀檢索系統》（網絡版，南開大學組合數學研究中心，天津永川軟件技術有限公司），80年代の口語資料を基礎に作成された《北京話口語語料庫》（中國人民大學文學院）などである。
- 28) 表中には中性義と積極義をまとめて非消極義として示した。
- 29) 賀（2008）p. 231 表 8-1 参照。
- 30) 賀（2008）p. 234 表 8-4 参照。



- 31) 賀 (2008) p. 36 参照。日本語訳は筆者による。
- 32) 賀 (2008) p. 242 表 8-6 参照。
- 33) 崔 (2013) p. 17-p. 18 参照。
- 34) 原文は以下のとおり。“描述各种欧化语法现象与汉语原有语法形式此消彼长的演变过程，说明这些欧化语法现象是在继续发展，还是正在逐渐消失，是与汉语的传统并存，还是已经或者可能取而代之。” (2008 p. 2)
- 35) 賀 (2008) p. 140 表 5-4 参照。
- 36) 賀 (2008) p. 144 表 5-5 参照。
- 37) 崔 (2013) p. 432 第三节当…之的/的时候 参照。
- 38) 賀陽は「伝統的な中国語では“被”構文の述語は一般的に処置性のある動詞だったが、英語の受身文にはその制約がないため、五四以降中国語はその影響で非処置性の動詞を述語に持つ“被”構文が増えた。これも欧化現象と言える」と考えた。

本研究はJSPS 科研費 25370500 (研究課題名『清末民国初期華英言語接触所産の華語の特徴についての実証的研究』) の助成を受けたものである。

#### 参考文献

- 大河内康憲 1961 最近の書面語から見た五四の白話文『中国語学』108号  
 大河内康憲 1962 白話による初期の翻訳文体について『中国語学』118号  
 大原信一 1994 『近代中国のことばと文字』東方書店 第5章 白話文の欧化  
 大原信一 1996 「五四」以降の白話文の変遷 京都産業大学国際言語科学研究所所報第17巻第2号  
 王还 1983 英语和汉语的被动句《中国语文》第6期  
 王力 1943 《中国现代语法》商务印书馆 1985年版  
 王力 1944 《中国语理论》(《王力文集》第一卷) 山东教育出版社 1984年版  
 王力 1958 《汉语史稿》中华书局, 2012年版  
 王力 1990 《汉语语法史》(《王力文集》第十一卷) 山东教育出版社  
 賀陽 2008 《现代汉语欧化语法现象研究》商务印书馆  
 Kubler Cornelius C. 1985 《白話文歐化語法之研究 A Study of Europeanized Grammar in Modern Written Chinese》Student Book Co., Ltd.  
 崔山佳 2013 《汉语欧化语法现象 专题研究》四川出版集团巴蜀书社  
 邵华强 2011 《中国文学史资料全编 现代卷 66 徐志摩研究资料》知识产权出版社  
 関光世 2015 徐志摩の翻訳作品に見られる欧化現象について『京都産業大学論集』人文科学系列第48号 p. 157-175  
 関光世 2016 徐志摩の翻訳作品に見られる“被”構文と欧化『中国語学研究開篇』34号 p. 223-231 好文出版  
 宋玉柱 1985 关于“被”字句的语义色彩问题《学中文》第5期  
 北京师范学院中文系 1959 《五四以来汉语书面语言的变迁和发展》商务印书馆  
 张延俊 2010 《汉语被动式历时研究》中国社会科学出版社  
 謝耀基 1990 漢語論叢《現代漢語欧化語法概論》光明圖書公司台灣學生書局  
 橋本万太郎 1987 汉语被动式的历史・区域发展《中国语文》1987年第1期 p. 36-49  
 邢福义 2004 承赐型“被”字句《语言研究》第24卷第1期  
 朱德熙 1987 句子和主语《世界汉语教学》(创刊号)  
 租人植 1997 “被”字句表以特性分析《汉语学习》第3期



## Changes in the study of Europeanization in the Chinese language and future possibilities

Mitsuyo SEKI

### Abstract

It can be said that research concerning the Europeanization of Chinese began with Li Wang. However, subsequent studies were conducted overseas, and there was no follow up research in mainland China resulting in a 'blank' period. Revival of interest in this area began to be seen at the beginning of the twenty-first century with research published by He (2008) and Cui (2013), but no one has assessed their results objectively.

This paper will review the period starting with the formation of Europeanization until Li Wang as well as the 'blank' period from Li Wang until the end of the twentieth century, and then concentrate on the revival of interest in the field mentioned above with a particular focus on He (2008).

As a result, it was found that using the four points below to supplement the deficiencies in the arguments of past research from the period of revival in combination with a synthesis of the arguments up till now has opened a door to a new period with new opportunities for the study of research in the Europeanization of Chinese.

1. The reliability of research was increased through the use of corpus.
2. Rather than just simple comparison, comparison was based on the frequency of use.
3. A synthesis of arguments relating to distinguishing Europeanization seen here and there during the 'blank' period.
4. By taking research in Europeanization to a new level through the examination of changes of Europeanization in the Chinese language over a period of time.

Through this paper, it can be seen that future research in Europeanization will focus on examination of long-term effects of Europeanization in the Chinese language. Using arguments concerning the Europeanization of Zhimo Xu's passive sentences as an example, this paper argues that examination of a certain writer's works at a certain time in history needs to involve analysis of the degree of Europeanization.

**Keywords:** Europeanized Grammar, Modern written Chinese, Li WANG, Zhimo XU, degree of use